

周辺市場アジアにおける 1980 年代以降の国際資本移動

亜細亜大学 布田功治

本報告では、国際金融の周辺市場として位置づけられるアジアを分析対象とし、国際金融ネットワークにおける主要アジア諸国の立ち位置の一端を明らかにすることを目的とする。その際、下記に示す問題関心とデータ制約から、1980 年代以降の各国の国際資本移動の変化、とりわけ金融勘定収支細目のグロス値の変化に着目し、国際金融ネットワークにおけるアジア諸国の立ち位置の類型化を試みたい。

Flandreau and Jobst(2005)を嚆矢として、現在、国際金融ネットワークに関するネットワーク分析が盛んとなっている。それらの研究では、国際金融ネットワークにおける各市場間あるいは各国間の静学的な構造把握と動学的な連関把握に問題関心を持つ。本報告もそれらと同様の問題関心を持つ。

ただし、先行研究ではネットワーク分析を可能とするデータの入手可能性の観点から、為替取引あるいは証券取引の国際金融ネットワーク分析に限定するものが多い。一方、ネットワーク分析に必要なデータの不足する銀行経由での国際金融ネットワークにも、本報告は大きな問題関心を持つ。

そのため、本報告ではネットワーク分析以外の方法で、国際金融の周辺市場としてアジアを位置づけるネットワークの存在を前提とした上で、アジア主要諸国はそのネットワーク内でどのような立ち位置にあるのか、たとえばアジア域内金融ネットワークでも Hub&Spoke 構造は存在するのかという課題を設定し、そのネットワークの静学的な構造と 1980 年代以降の動学的な連関の一端を示すことを試みる。

具体的には、ここ数十年間の国際金融の大きな特徴として、グロス値でみた国際資本移動拡大を指摘する Borio and Disyatat(2011)や岩本 (2013) を参考とし、金融勘定収支細目のグロス値をとりあげる。そして、Obstfeld(2004)による GL 指数や Lane and Milesi-Ferretti(2007)による FG 指数に倣って金融勘定収支のグロス値を用いた新たな国際資本移動指標をいくつか策定する。それらの指標の時系列的变化に基づき、国際金融ネットワークにおけるアジア主要諸国の立ち位置の類型化を試みる。

付記：本報告は、JSPS 科研費 16K03766 の助成を受けた研究成果の一部である。